

《本号の表紙絵》

呉秀三の二松学舎入学願書

(二松学舎大学所蔵)

学校法人二松学舎には、創立当初の『入学願書綴』が5冊伝えられている。本号の表紙に掲げたのは、その第4冊目(明治13年6月~12月)に綴じ込まれている呉秀三の入学願書である。

二松学舎は漢学者三島中洲(1831~1919、名は毅、字は遠叔、中洲と号す)が明治10年10月10日に創設した漢学塾である。三島の歿後、親交のあった実業家渋沢栄一(第3代舎長)の下で昭和3年(1928)に国漢中等教員養成のための旧制専門学校となり、更に昭和24年(1949)に新制大学となって今日に至る。

三島は備中窪屋郡中島村(現倉敷市)の豪農層出身で、地元の陽明学者山田方谷や江戸の昌平黌に学び、備中松山藩(現高梁市)の儒者となり、維新後は司法省や東京大学に奉職し、晩年は東宮侍講として大正天皇を教え、傍ら麴町一番町(現千代田区三番町)の自宅に漢学を講じた。中等教育機関の未発達な明治前期において、漢学は洋学による高等教育の基礎学として機能していたため、漢学塾は多くの入学者を集めたのである。

開校に当たって三島が起草した「漢学大意」では、その冒頭に漢学の目的として「己ヲ修メ人ヲ治メ一世有用ノ人物トナル」ことを掲げている。そして「漢学」の目的が「一世有用ノ人物トナル」ことにある以上、洋書の兼学は必須であるから、漢学の課程を簡易にして洋学の余地を残したと述べている。実際、当時の塾生たちは漢学塾・英学塾・算学塾などに通いながら上級学校進学に必要な学力を習得していたのであり、二松学舎からも陸軍士官学校・司法省法学校・東京大学などに多くの進学者を出している。

掲出した入学願書の文面は、『二松学舎舎則』(1879年版)所収の雛型を書き写したものであり、やや硬いその筆跡は呉秀三の自筆にかかるかと判断される。転記しておこう。

保証状

廣嶋縣下巳斐村百七十六番邸／麴町元園町二丁目八番地寄留 呉秀三 十五年八月
右之者貴舎へ入學致候上ハ社則堅ク相守ラセ可申ハ勿論犯則又ハ疾病及ビ不品行等
有之節ハ此方ニ引受ケ貴舎へ御迷惑相掛申間敷候也

右証人 麴町元園町壹丁目四十三番地 村上義方

十三年十月一日 二松學舎監事御中

保証人の村上義方は、『官員録』によれば静岡県士族で太政官調査局に勤務し、秀三の兄呉文聰の同僚に当たる人物。また呉文聰と同じく統計協会の創立会員でもある。調査局には三島中洲の親友南摩綱紀も在籍したので、呉秀三の二松学舎入学の背景はこのあたりの人脈によるものかと推定される。参考までに、呉秀三が入学した前後の入学者と保証人を拾ってみよう。生徒には橋周太(1865~1904、陸士旧9期)や田島錦治(1867~1934、帝大法科政治学科卒、京都帝大初代経済学部長)ら、保証人には福島安正・谷干城・島地黙雷・神鞭知常・清浦圭吾らの名が見出せる。

呉秀三が若くして漢学を熱心に学んだことの意義については、なお今後の検討課題としなければならない。

(町 泉寿郎)